

ナチュラル、上質、エレガント、創作的……
2021年MUKUのウェディングは、
オーセンティック(普遍的)に進化を遂げる

時代の流れとともに大きく変化を遂げるウェディング事情。
式を挙げるおふたりやゲストの方々の心に刻まれる
思い出深いウェディングをつくるには？
MUKU by Massa & Artistsで指名多数の人気アーティスト
吉野絵美、相浦由紀子が、過去、現在、
そして未来のウェディングについて語り合った。

— 最近のウェディング、何か変わったことはありますか？



吉野： まず、空間を広く使う機会が増えましたね。もともとパレスホテル東京はテーブル同士の間が広いのですが、ソーシャルディスタンスの確保でテーブル数が少なくなったため、これまで大きい装飾をしていなかったスペースにも飾りつけることが多くなりました。

相浦： お客様のテーブルに(飛沫防止の)アクリルパネルを設置することが多くなったので、パネルがあっても美しく見えるデザインやパネルの圧迫感を感じさせない装飾を考えるようにもなりましたね。向かい側の席が気にならないデザインを考える機会も増えました。

吉野： このコロナ禍で結婚式の既成概念が取り払われた気がします。席次にしても、近くで対面できないことから大きな口の字型にテーブルをセッティングし、お誕生日席に新郎新婦、長い辺にゲスト。真ん中にテーブルを設けてお花を装飾する提案もしました。

相浦： これまではメインテーブルもしくは2人の席があるのが当たり前だったけれど、それらをなくして、代わりに各卓に2人の席置いて一品ずつ新郎新婦がお料理を楽しみながら移動するという形式も。このような時期だからこそ、そういう感覚が必要なんですよ。今は「(制約がある中で)何かできませんか?」というリクエストに対しても対応できる柔軟性を持ちながらやっています。

— 今のデザインの流れはどのようになっていますか？

相浦： 3、4年前までは、お花のボリューム感や濃いピンクなど派手な色が求められましたが、今はゴージャスよりもシンプルに。素材を活かす方向にシフトしています。たとえば、ランの花のように瀟々としたフォルムの花を使って「上質感」を表現するスタイルに人気が集まっています。そういうデザインの場合には、花器とのバランスも大事ですし、お花1輪1輪がすぐ際立ってくるので、特に慎重に選んでいます。

吉野： MUKUでは今年になってから、一度原点にかえろうということになりました。「パレスホテル東京が大事にしていることってなんだろう?」と見直したとき、そのひとつに「ホテルの立地」があって、皇居という歴史ある場所の隣にありながら、丸の内という進化し続ける場所にも位置している。相反するふたつのイメージをお花でどう表現するか?を考えたとき、器のテイストも大事だけど、そもそものお花の美しさをもっと大切にしなければいけないと思うようになりました。

相浦： 伝統と新しいものの融合をベースに日本の四季を取り込み、お客様に合うテイストに落とし込んでいくイメージですね。

吉野： かつて、お花以外の素材を組み合わせて「変わったデザインをつくらなければ」と思っていた時期もあったのですが、異素材が増えすぎることによってお花のよさを引き出せているのかな?と疑問を持つようになり、現在はオーセンティック(普遍的)なところに立ち返っています。今のテイストを大事にしつつも、流行に流されすぎない。元からあるものを、さらに深堀りしているのが今です。

相浦： あと、パレスホテル東京は「ナチュラル」な感じをリクエストされることが多いですね。やはり、窓から見える皇居外苑の緑の要素が大きいのもかもしれません。吉野： 一言で「ナチュラル」といっても実は幅広いんです。草原的なナチュラル、ガーデンのように整えられたお花畑のようなナチュラル……。季節によっても違います。初夏であれば明るい緑、秋にかかってくると少しくすんだ色の緑……。挙式の時期なども考えながら、おふたりに合う最高のナチュラルを表現していきます。相浦： 窓から見える季節の緑の移り変わりが壁紙のような役目を果たし、その色味に部屋の中のお花がリンクしてより美しくなるんですよ。

— デザインする際に重視していることはありますか？

吉野： おふたりのことをヒアリングし、その中からアーティストが感じるインスピレーションで幅広く提案させていただけたら、という思いが常にあります。そのために「おふたりってどういう方ですか?」「どういう思い出がありますか?」というところをしっかりと聞きします。ホテル全体に言えることなのですが、「プロにお任せください」といつもお伝えしています。

相浦： 以前、冬にウェディング予定のお客様の「雪のイメージからゲストを驚かせることがしたい。見たことがないものを」という一言からインスピレーションを得て、「氷の器」をつくったことがありました。水風船にお花と水に入れて凍らせ、お花が入った丸い氷をつくり、水盤の上に氷が載せられるアクリルベースを置いて生けたのです。時間が経つと氷が溶けて、下の水盤にお花が浮かぶ仕組みです。

吉野： おふたりの抽象的な望みを具体的に表現していくのが私たちの仕事だと思っています。つぶやきレベルの願いもしっかりキャッチして、形にする。

相浦： そういうリクエストが来るとうれしいし、腕の振るい甲斐がありますね(笑) 最近では、来ていただいた方たちに明るい気持ちになってもらいたい、癒されてほしいというリクエストも増えています。

吉野： まさに空間で考えるのは自分たちの得意とすることです。「片方だけでもダメ」という考えを持つチームなので、お花だけ、演出だけでは終わらない。「お花+空間演出」ができるのが私たちの大きな強みです。

相浦： パレスホテル東京はホテルの中でも考え方が柔軟なため、自由度も高いかもしれません。たとえば、ステージを3段に組んだり、ランウェイをつくって新郎新婦席までの道のりをふたりで歩いてもらったり。スペースもあるし、設備も整っている分、できることの幅はぐっと広がると思います。

— MUKUが提案するデザインの進化系は？

相浦： 結婚式って人生で1度きりのことが多く、何年経ってもその日は特別な日ですよ。パレスホテル東京も「何年経っても色あせない」ことを大事にしていますが、あとで写真を見返したとき、「やっぱりきれいだね」と思えるものをご提案したいですね。

吉野： これからは少輪のお花でも高級感があるスタイルが広がってくると思いますが、その先、次の時代に続くものをMUKUから発信出来たらいいですね。ありがたいことに同業種の方から「撮影の際お手本にしました」と言ってもらうことも。その位置はキープしつつも、創作的なだけでなく、ナチュラルもあるし、エレガント、上品さ、洗練、高級感も。普遍的なものとして先駆けとの融合を追究していきたいです。



吉野 絵美
Emi Yoshino

2016年、Massa & Artistsに所属、2017年 Designerに就任。ウェディングやイベント、ハイブランドのショップコレクションを中心に、幅広く空間コーディネートを担当。しなやかで女性らしい繊細さと幅広い表現力に定評があり、多くの花嫁から指名される人気と実力を兼ね備えたアーティスト。



相浦 由紀子
Yukiko Ainoura

アパレル業界にて服作りやデザインの経験を経て、空間装飾を学ぶため大手花屋に入社。2015年、Massa & Artistsに所属。数々のウェディングパーティーイベントを手掛ける。洗練されたシンプルなお花やデザインコレクションやトレンドをつかんだ空間作りをはじめ、独創的で心に残る空間づくりを得意とする。



VOL.007

MUKU
RETURN
TO
BASICS

